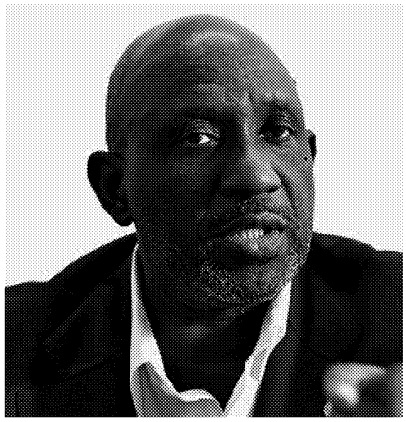
（1面参照）

若者の不安 年長者に責任

京都精華大学長 ウスビ・サコ氏



Oussouby SACKO　マリ生まれ。中国・北京語言大などで学び、日本留学。京大博士。専門は建築と社会。18年から現職、54歳

新型コロナウイルスは世界に潜んでいた様々な対立や分断をあらわにした。京都精華大のウスビ・サコ学長に経済や社会に生じた断層と、その修復の可能性について聞いた。

――コロナの世界的な感染拡大は様々な矛盾を浮き彫りにしました。

「コロナ前から世界には貧富の差などの分断が存在していたが、経済が回っていたので見て見ぬふりをしてきた。モノさえ回っていれば先進国にも発展途上国にも取り分があったからだ。しかしロックダウン（都市封鎖）などで生産や流通が動かなくなると、モノ中心の経済は崩れた。市場経済が約束していたはずの幸せが幻想だったと明らかになった」

――モノは回らなくなりましたが、デジタル化は加速しました。

「情報量の増大は人々のコミュニケーションを活発にした。SNS（交流サイト）を通じた批判は時に過激化したが、これまで苦しんできた弱者が声を上げた側面が強い。背景には、強者が掲げてきた『自由』や『グローバル』という夢が実現性を失ったことへの人々の不満がある」

――コロナ対応では国や地域によって大きな差が生まれました。

「感染症に迅速に対応した中国はアフリカにマスクなどの物資を大量に送り、デジタル化も支援した。コロナを機に中国とアフリカとの絆は強くなり、『途上国ブロック』が生まれた」

「先進国は自らの使うモノが途上国から来ているという脆弱性が明らかになった。途上国ブロックができることで、自らが優先されなくなる恐ろしさも感じたと思う。途上国同士のつながりが強くなれば、先進国はますます苦しくなる」

――西洋が没落するということでしょうか。

「新しい動きが生まれるということだ。合理主義などの価値観で支えられた世界秩序はいずれ崩れるという予感はあったが、コロナにより早まった。これからは物質や合理主義を重んじる価値観から、人間を中心とする考え方に移っていく」

――具体的にはどのようなことでしょうか。

「目の前の人間、身近な家族、地域を大切にするということだ。コロナで移動が制限され、地域の楽しさに気づいた人も多かったと思う。地域に人を落ち着かせ、帰属意識を生み出すチャンスもコロナは生み出した」

――若者の雇用や教育が損なわれました。

「54歳の私以上の世代は、若い人にとって幸せな世界を作れなかったことを反省すべきだ。若い人を舞台の上に立たせ、自分たちは舞台裏に回って支えるのが良い。SNSを通じて若い人が声を上げる場が生まれたが、その空間を彼ら自身が発展させる時だ。地域間の分断も私たちの時代までのことで、若者は気にしなくてもいい」

（聞き手は高橋元気）

掲載日 2020年12月21日 日本経済新聞朝刊 003ページ
(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。